

生活力を育む家庭科学習

－自己の変容を実感できる子どもの姿をめざして－

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかかわって

① 生活力

家庭科の学習は、人やもの、環境などのかかわりを大切にしながら、食べることや着ること、住まうこと等を扱う。対象は、身近な家庭生活や家族、学校生活や仲間、自然や社会などであり、子どもたちを取り巻く環境そのものである。

その子どもたちを取り巻く環境の多様化がすすんでいる。子どもが生活的に自立する力や、家族や家庭生活の意義や大切さを理解する力など、自分の生活を豊かでより充実したものにしようとするための基盤となる力や心情を育むことが大切である。これらの力を基にして、「将来にわたってより健康的で快適な生活を創ろうとする力や心情」を「生活力」とした。多様化している社会において、自立的に生きるためには、「生活力」が必要であり、このような力を育み、生活への実践につなげていくこと、実生活への活かし方を身につけていくために、学びをデザインする子どもたちの姿をみとっていくことがねらいである。

② 自己の変容を実感する

家庭科学習では調理実習や製作実習に加えて、観察や実験等、体験的な活動からの学びを大切にしている。このような体験的な活動を取り入れた学習は、子どもたちにとって魅力的なものであり、積極的に取り組んだり、すすんで工夫を凝らそうとしたりする姿をみとることができる。しかし、一方でその場限りの体験に終わってしまったり、実生活へのつながりが希薄であったりする姿がみられてしまうこともあった。児童の生活の基盤は家庭にある。日常的に何気なく繰り返しながら生活していることが、実はなくてはならないとても大切なことであることに、学習を通して気付かせたい。そして、子どもが自分自身や家族の生活に関心を持ち、“生活させてもらっている自分”から“生活していく自分”へと意識を近づけていくことを、自己の変容ととらえ、3つの対話を大切に、特に自己との対話に重点をおいていく。そして主体的に生活にかかわり、よりよいものにしようとして工夫しながら実践する態度を育てていきたい。この自己の変容こそが、学びをデザインしようとする子どもの姿へとつながると考える。

(2) 家庭科学習でめざす子ども像

家庭生活はだれもが行っていることである。分かりやすく簡単なことのように感じられるだろうし、豊かな時代に生まれ、便利なものがあふれているこの時代では、特に意識しなくても快適な生活を送ることが可能である。家庭科の学習を、家庭生活を見つめ直し、関心を高めながら、家族の一員としての自分、大切な家族の存在に気付き、“大切にしよう、そのために自分ができることは何なのか”を考えていくきっかけとさせたい。そして、家庭科学習での学びを通して、自己の変容を実感し、将来にむけてよりよい生活者となっていく、自分の姿をイメージしながら、主体的に生活の実践につなげようとする子どもの姿をめざしたい。

以上のことから、家庭科学習でめざす子どもの姿を次のように考えた。

◇ 意欲的に取り組み、よりよいものを考える子ども

当たり前になりがちな生活を意識しながら主体的に考え、行動し、工夫を凝らしていくことができる子ども。

◇ 自己の課題にこだわった実践へとつなげる子ども

子どもたちの家庭生活は個々様々であり、それぞれの課題は異なるものである。自分にふさわしい課題を見つけ、自分自身や自分の家庭に必要なだと考えられる課題解決へと、こだわりをもって思考をめぐらし、実践しようとする子ども

◇ たのしんで生活に活用しようとする子ども

家族や家庭生活を大切に思い、大好きな家族のためによりよく生活に活用していくことをたのしむことができる子ども。家族の一員として生涯にわたって自らの生活にはたらきかけをしていくためには“たのしむ”ことが大切である

2. 家庭科学習における「学びをデザインする子どもたち」

家庭科学習における「学びをデザインする子どもたち」＝「学ぶ筋道を考えて課題解決に向かう子どもたち」の姿とは、“必要性を実感し、自分らしく生活に活かそうと工夫するために思考をこらし、実生活につなげようとする子どもたち”の姿であるにとらえる。

課題解決	題材の様々な場面において、学びの経験を活かして自分の生活をよりよくするために必要なことを設定し、そのためにはどうすべきか、何をすべきかを考え、実生活につなげようとする
対話	<p>① 対象との対話 → 調べ学習やアンケート調査、実験や観察等を通して対象とどっぷりと関わりながら“必要性”を実感していく。</p> <p>② 他者との対話 → 様々な課程において、ペアやグループ、全体での話し合いを取り入れることで、共感したり自分と異なる点を意識したりしていくことで、よりよいものを探っていく。また、家族やお世話になった人たち、友だちから感謝されたり、ほめられたり、認められたりすることによることも、自己の変容へとつながる大きな要素である。</p> <p>③ 自己との対話 → 自分の生活を見つめ直し、“生活させてもらっている自分”から“生活していく自分”へと意識化しながら、今、できること、何をすべきかを自問自答していく中で、自己の課題を設定し、実生活につなげていこうとする</p>
学び方	必要性を実感したり、自分らしく生活に活かすためには、どのような学び方が適切なのかを選択し、活用しようとする

☆学びをデザインする子どもたちの実践例

自分たちの朝食を見つめなおし、野菜不足に気付いた子どもたちとともに、「かんたん&おいしく野菜を食べるためには？」を課題として話し合った。話し合いの前に、自分の家庭でも冷蔵庫にある野菜を1つずつ持ち寄り、6Cのベスト3を予想し合ってから授業をスタートさせた。そして、“かんたん”“おいしい”という2つの言葉をキーワードとして食べ方や調理方法の工夫を話し合った。授業に入る前まで、朝食の必要性や野菜の重要性について調べたり話し合ったりしてきたが、子どもたちにとって実感のある話し合いや調べ学習にはなりがたいところがあった。本時では、“かんたん&おいしい”という言葉のとらえ方に個人差があったことで、子どもたちの思いにばらつきがあったところもあった。一方で、実際に自分の家庭での野菜を持ち寄り互いに予想し合ったりすることで、子どもたちの実生活そのものを出し合ったり、イメージしたりすることができていたと思われる。

そう : タマネギとかは、炒めると甘くなっておいしくなるから、いいと思います。

T : 「炒める」という調理方法も出てきたね。他にはないかな？

りく : さっき出た生と似ているけど、そのままじゃなくて野菜ジュースにしてみるとか

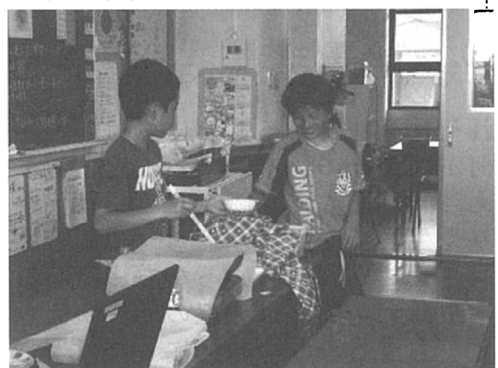
C : あ〜、いいな。

ゆう : やっぱ、巻くのがいいと思います。海苔巻きみたいに、きゅうりでも何でもまけるし、おいしいから。

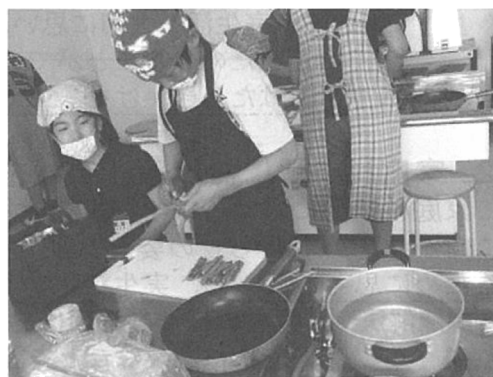
せい : ゆうに付け足しで、キャベツだったら、ロールキャベツとか、あるなあ。

なな : また、別の意見なんやけど、型ぬきしてかわいくするとか。

C : あ〜、



T : その反応、経験ある？
 C : この前のカレーや。
 C : あったあった。
 C : 喜んでいたよな。
 せい : キャベツは、葉っぱの部分は食べやすくても、芯はかたいやんか。でも芯をしっかりと炒めたら、たべやすくなったりもするで。
 C : あ～
 T : みんな、キャベツの芯まで、きちんと食べているのかな。
 ゆう : ぼくが風月に行ったとき、塩キャベツが出たんよ。キャベツそのままやったんやけど、食べてみたら、しんもおいしかった。ごま油も少しかかっていたと思う。だから、あれはいいと思うんやけど。



授業の後半部分で実際に「かんたん&おいしい野菜料理」のおすすめを、児童C3が実演し、実際に作って子どもたちに紹介した。それを受けて授業者も我が家のかんたん&おいしい野菜料理を実演して子どもたちに紹介した。炒めるときの音、においなどにふれ、机上のみの学習から一変し、子どもたちは実際の生活と結びつけながら、自分の生活や今までの学習振り返りながらメニュー作りに取り組む姿が見られた。対象にふれたり体験したりすることが、すすんで実践につなげようとする子どもたちの姿につながるんだとあらためて実感した。

授業翌日、何人もの子どもが授業で紹介した野菜メニューや、授業で自分が考えた野菜メニューを家で実際に作っていた。自分なりのアレンジを加えていたり、家にある食材におきかえていたり、様々なメニューと実践の工夫も見られた。実際に自分が考え、実践してみた体験をもとにすると、子どもたちは生き生きと自信を持って話すことができていた。そこで、ペアを作り、自分が考えたメニューを「一人調理」する実習を行ったあと、当初の計画を変更した。「一人実習」では、観察者が料理人をチェックし、相互評価を行う。食材はそれぞれ家から準備してきたものを使用した。子どもたちの中から「〇〇くんのメニュー、私には考えつかなかった。是非、”作り方を教えてもらいたい」「先生、〇〇ちゃんの野菜炒め、何か私のと違っておいしそうにできていたから、次はあんなのを作って見たい」などの声が出てきた。そこで、一人実習後、互いのメニューを紹介し合い、「これはかんたんで賞」「これはおいそうで賞」「野菜たっぷり健康で賞」の3つの賞を作り、投票して入賞者を決めて、選ばれたメニューを考えた児童は〇〇シェフとなって、クラスみんなに作り方を伝えることとした。選ばれた児童がシェフとなり作り方のポイントや野菜を炒める順序など、みんなに伝え、みんなで調理実習。このように2回の実習を行うことで、調理の技能の定着をはかるとともに、すすんで学校で実習し、家庭でも作ってみるといふ子どもの姿が見られた。また、互いのよさを認め合える雰囲気も高まった気がしている。家庭科では、個々がちがう家庭生活をもとにしなが、互いのよさを認め合い、理解し合いながら吸収し合い、実践へとすすんでつなげていく姿につながる学習が、学びをデザインする子どもたちの姿なのだ実感できた。

① “必要性を実感する”ための課題設定

“必要性を実感する”ためには、家庭生活を構成しているものや生活行為・活動にはそれぞれ意味があることに気付くことが必要である。生活体験への意識が少ない児童には、何が問題なのかを捉えることが難しいだろうと予想される。生活上の問題を問題として捉え、課題として意識させるには、生活への関心をもたせなければならない。自分自身の周りや生活場面を振り返らせて観察させ、仲間との意見交換を通じて問題であることを再認識させたり、いろいろな方法があることに気付かせたりすることが必要である。

生活上の問題は児童の手に負えないものもあるので、発達段階を考慮して、解決の見通しがもてるような課題にして学習させるようにしたいと考える。時として、課題設定の主

体は教師，児童の両者でと様々なケースが考えられるが，学習のねらいと考え合わせる的外れにならないよう，教科の特性上，教師の役割の大切さも意識していきたいと考える。

生活上の問題を問題として捉え，全体課題“テーマ”として捉えることができるような内容のものを，教師の支援を最大限に活用しながら設定し，解決へと思考をこらしていきたい。

② “自分らしく生活に活かそうと工夫する”ための題材設定

現在の児童の忙しい生活を考えると，すべてが実践できるとは限らない現状にある。しかし，生活の基盤となる生活を主体的に営めるよう意識していくことは必要で，小学校時代はその基礎を培う時期である。

生活はいきているものであるから，その生活に主体的に向かっていく行動力がなければならぬ。子どもたち個々の生活に応じた実践や活用を考えて行動できるようにしていきたい。そのためにも，学習で扱う教材を吟味し，児童の生活実態からかけはなれないよう実態把握のための事前アンケート等，心がけながら，題材終末の振り返り活動，今後の生活への個々の課題の設定を大切に，取り組んでいきたい。その際，自分だけでなく相手意識をもって考えたり実践したりできるよう，支援していきたい。

3. 研究の展望

研究テーマと関わって，子どもたちの実態をふまえながら「学びをデザインする子どもたち」の姿をみとっていくための手だてとして，サブテーマ“自己の変容を実感できる子どもの姿”をポイントにしていく。そして，題材，学習活動を設定し，正しい認識力・判断力を育てていくよう，子どもたちへの日々のはたらきかけを行いたい。

(1) 題材設定において

- ① 体験活動や実習をいかし，子どもたちの興味・関心を高められるような工夫
- ② 五感を通した直接体験を通し，実感を伴った具体的な学びを展開
- ③ ペア実習（グループ実習）や一人実習を取り入れ，技能の定着をはかる。
- ④ 根拠のある科学的な見方を大切にし，生活への必要性・重要性を高める
- ⑤ 現在の社会生活の中に起きているタイムリーな内容を取り入れる

(2) 日常生活の中での取り組み

保護者の協力も得ながら，家族の一員としての自分に，意識を持たせるため，自分たちができることとして，「お弁当箱洗い」「テーブルクロスやマスクの洗濯」等を取りあげ，実践していきたい。他にも週末や長期休み中を利用し，必ず何かにチャレンジする機会を作っていきたい。やってみて初めてわかることや再認識できることも多く，子どもの意識の変容や家庭生活を見つめ直すよい機会になるだろうと考えている。

3. 研究の評価

体験的活動の内容により，グループでの活動，ペアでの活動を取り入れ，自己評価だけでなく相互評価を取り入れていく。互いに見合うことにより，自分のことだけでなく，仲間のことも含め，今まで気付かなかったことに気付いたり，活動への意識や意欲が高まったりすると思われるからである。また，題材の終わりには自己の活動振り返りシートを活用していく。教師が子どもの実態を把握していくと共に，子ども自身が自分の変容や成長を実感し，自分の生活への実践につなげていくためのきっかけとしていきたい。

参考文献 内野紀子・藤原孝子 編著『新学習指導要領の展開 家庭科編』
明治図書（2009）
筒井恭子 編著『小学校家庭科の授業づくりと評価』明治図書（2012）